

批評と紹介

Études Song (Sung Studies) in
memoriam Étienne Balazs

—Série I : Histoire et institutions, 1 & 2—

Françoise Aubin éd.

Mouton & Co. and École pratique des
Hautes Études, 6^e Section, 1970 & 1971.

180 pp. d'ensemble.

本書は故エティエンヌ・バラシュ教授(1905—1963)を記念する宋代研究論文集のうち、第一部「歴史と制度」の第一および第二分冊である。出版の都合上、分冊形式にならざるをえなかったようで、後に紹介するように、今後なお多くの分冊が續刊されるはずである。

故バラシュ教授は、いまさら紹介するまでもなく、雄大な「宋プロジェクト」の提唱者・組織者として精力的に活動されていた矢先に、一九六三年十一月二十九日、突如心筋梗塞に襲われて急逝された。晩年の教授の念頭から片時も去ることのなかった宋代研究について、世界各国から教授を記念する論文が寄稿され、教授の最初の弟子といわれる蒙古・元朝史の専門家フランソワズ・オーバン夫人によって、この「宋代研究」が編集出版されつつあることは、教授の遺徳を記念するのにもっともふさわしいことだといえることができる。

る。

宋代研究にうとい私には、このような記念論文集を紹介批評する資格は本来ない。しかし、教授が少くとももう一年在世されたならば、私も大きな顔をして教授の弟子だと自稱できたろうと悔まれてならないのである。私事にわたって恐縮であるが、教授の最晩年に接し得たものの一人として、教授を記念する意味において、少しく私事をのべさせて頂きたい。

一九六三年夏に渡佛の機会を得た私は、在佛中、教授の講筵につらなつて、その指導を仰ぐつもりであった。École pratique des Hautes Études (高等研究院)の新學期の講義は十一月から開始され、教授の講義題目は *Mobilité sociale en Chine impériale* (帝政時代の中國社會の流動性) というものであった。ソシアル・モビリティの概念はアメリカ社會學の系列に屬するであろうが、教授はこれに正面からとりくんで、舊中國ことに宋以後の、教授のいわゆる *le modène* (近世) の、社會構造を説明するために利用しようとしたらしい。週一回二時間の講義の最初の二回は、この問題に關する在米學者、つまり W・エーベルハルトや何炳棣らの諸氏の説を紹介された。そろそろ教授自身の見解が示されるかに思えた第三週目は残念ながら休講であった。その直後である、教授の計報に接したのは。

一語一語はつきりと、しかも比較的ゆっくりと話してくださる教授の明晰な講義は、社會史に關する私の関心とも相まって、貧弱な語學力の私にも、教授の講義を軸にすえて勉強に勵む勇氣を與えてくれるものであった。その矢さきの計報は、私にとって一時は導きの星を失つて、突如として闇中に投げ出されたかのごとき衝撃を與

えた。

在佛中の福井文雅氏につれられて、葬儀に参列すべく、パリ郊外のフォントネー・オー・ローズにある教授のアバルトマンを、はじめて弔問したとき、木々の枯葉は落ちつくして、全くの冬景色であった。どんよりと灰色の雲が一面にたれこめた寒い冬空のもので、教授の柩はお宅の近くの教會墓地に埋葬された。お棺が冷えきった土に覆われる前に、はしくも一輪の花を手向けることのできた私は、そのとき寒風の吹く墓地に立ちすくんでおられたドミエヴィル教授をはじめ、諸先生がたの沈痛蒼白なお顔を忘れることができない。

本書の冒頭に掲げられたドミエヴィル教授の追憶の辭に見えるように、十八歳にして故郷プタペストを離れ、ベルリンで刻苦勉勵して唐代經濟史の大論文を書かれたものの、やがてヒトラーに追われてフランスにのがれ、ナチ占領中は田舎に逼塞して慘憺たる苦しみをなめられたのち、戦後フランスによりやく研究職・教授職を得て安定した研究活動をすごされたのは、わずか十五年にも満たない。その間に驚くべき精力的な業績を發表し、さらに雄大な宋代研究の成果が期待されたのに、またしても運命は教授にあくまでも醗薄であつた。いな、教授個人にとつてだけでなく、ヨーロッパのシナ學にとつてもまたそうであつた。寒空のもので、冷えびえとした土に覆われてゆく教授のなきがらに、運命の醗薄を感じないものがあつたらうか。

私は教授に、さらに多くを期待していたものの一人である。それが教授自身から直接答えて頂けなくなつたのは痛恨のきわみであるが、教授の時かれた種は、世界の各地に育つて、その成果を集めつ

つある。本書もまた、その成果の大きな集成の一つにほかならない。私には本書を批評する資格がないけれども、以上にのべたような、いささかの因縁において、本書の紹介を行なうことを許して頂きたいと思う。

本書は先にふれたように、まずドミエヴィル教授の眞情あふれる追憶の辭を冒頭に冠する。そして寄稿された諸論文に移る前に、編集者オーバン夫人は、本書全體の編集方針が故バラシユ教授の遺志を忠實に繼ぐものであることを明示する諸種の手引きを置いた。すなわち、第一部「歴史と制度」の總目次、諸論文において扱われる主要な事件とその相互關係の理解を容易にするための「主要事件年表」、本書を通じて用いられる引用文獻と述語の「略字表」、そしてオーバン夫人の「第一部のための序文」と「凡例」。

夫人の序文によれば、バラシユ教授の *Manuel de l'histoire des Song* (宋代史提要) は、第一巻が宋代文獻解題、第二巻が A. W. Hummel, *Eminent Chinese of the Ching Period* と同じタイプの宋代名人傳記集成、第三巻が宋代文明の諸相を餘すところなく展開した綜合的な論文集、となるはずであつた。教授の遺志は現在にもひきつがれ、文獻解題は Y・エルヴェット教授が、傳記集成は H・フランケ教授がそれぞれ監修責任者となつて編集されつつあることは周知のとおりである。そして本書は、バラシユ教授が豫定された第三巻作成の遺志をも繼ぐものであり、單に雑多な論文を集めただけの、いわゆる記念論文集以上のものが意圖されているのである。したがつて、ここにはバラシユ教授の第三巻・綜合研究論文集のために寄せられるはずであつた論文もいくつ含まれている。そ

して、教授が意圖しておられたように、大きなテーマによって寄稿論文を區別し、第一部は「歴史と制度」というテーマにまとめ、宗教・哲學・藝術・文學・言語などに關する諸論文は第二部「文明」(未刊)のテーマにまとめられる。第一部はさらに次のように區分される。

I 「人口統計」篇……何炳棣論文

II 「外交史」篇

1 H・フランケ論文(以上・本書第一分冊所收)

2 E・I・キチャノフ論文

III 「軍事史」篇……S・A・シニコリヤル論文

IV 「民衆蜂起の歴史」篇

1 G・Ja・スモーリン論文

2 宮崎市定論文(以上・本書第二分冊所收)

V 「名人」篇(以下・未刊)

1 W・フランケ「歴史的先驅者か偶然のくりかえしか——」

〇〇四年の寇準と一四四九年の于謙との比較

2 C・シロカワー「行政官としての朱熹」

VI 「制度」篇

1 W・アイヒホルン譯「禮部」(『宋史』卷一六三より)

2 T・グリム「北宋における提舉學事司の設置」

VII 「經濟史」篇

1 E・バラシユ「十一世紀末中國の商業センター地圖」

2 青山定雄「宋代における水運の發展」

VIII 「都市の歴史」篇……E・バラシユ「宋代都市生活研究のための資料解題」

IX 「宋代旅行記」篇……左景權譯注「攬轡錄——范成大の旅行記」

X 「宋代史研究の工具」篇

1 M・ファン・デア・ルーン「宋代帝室系譜」

2 P・オルブリヒト「年號と皇帝表——宋・遼・金・西夏」

3 E・A・クラッケ「宋代職官表」

オーバン夫人の序文には、一方では自由に選擇された主題によって寄稿された諸論文の内容から必然的な制約を受けながらも、しかも他方では、できるだけバラシユ教授の遺志と存命中の關心の方向に沿って、諸論文の内容を分析し順序だてた次第が記されている。夫人がみずからいうように、宋代について獨自のイメージをもっておられたバラシユ教授ならば、これとは異った排列がなされたであろう。しかし、今はなき教授の綜合的精神をよく繼いで、かくも體系的にまとめられた夫人の學問的姿勢と、「凡例」に示されるように、この論文全體を一貫した體裁にととのえ、露文・日本文の原稿を佛文に翻譯し、理解に資するための地圖を作製されるなど、夫人が拂われた絶大な勞苦とに對して、ドミエヴィル教授の「追記」の驥尾に附して、深甚な敬意を表したいと思う。

う。

I Ho Ping-ti, An estimate of the total population of Sung-Chin China (宋金時代の人口總數推計)

「人口」篇としてまずとりあげられたシカゴ大學の何炳棣教授の論文は、『前記の研究』(Studies on the Population of China, 1968

—1953. Harvard Univ. Pr., 1959）を書かれたとき、一二二六年に北宋が滅ぼされる直前の中國總人口が約一億に達していたらうとの印象をもたれたことについて、今回その以前の研究ノートを再検討し、また新たに『金史』の兵志や食貨志とそこに見える人口調査の制度を研究して、その印象を裏づけられたものである。

第一章では、これまであまり注意されなかった金朝治下の人口が検討される。そのために、まず金朝が治下の人民を掌握した基本組織としての「猛安^{ムンガン}」「謀克^{ムグ}」の性格に注意し、百人の兵士から成る「謀克」、あるいは一二一六年の政令によれば三百戸から成る「謀克」と、十個の「謀克」から成る「猛安」は、單に金朝における軍事組織の基本単位であっただけでなく、實際には政治・社會・經濟のあらゆる面を含んだ意味で、民政支配の面でも基本単位をなしていたこと、その民政面の機能の一つとして、「猛安」「謀克」の全人口——奴隸を含む——が三年ごとに調査登録されたこと、そしてこの「謀克」内部の將兵關係は「父子兄弟」に比せられる親密さであり、かれらの家族をも含めて相互によく知りあっていたから、十二世紀後半から十三世紀はじめの女眞の人口調査は、かなり高い掌握度をもっていたこと、を指摘する。この「猛安—謀克」組織には、中國人と渤海人はかなり早くから組みこまれ、一二二四年と一一四五年の勅令によって、かれらの組織が繼續して存在しつづけたこと、および征服された契丹族も一一二二年以後この組織にくりこまれたこと、が注意されている。

しかし、「猛安—謀克」軍がしだいに漢化され退化してゆくにつれて、全國的に一般庶民を軍務に徵集する必要があるが、かくて『金史』食貨志に見えるような人口把握のための詳細な規定が生ま

れる。年令別規定の詳細さ、都市と農村別の人口把握システム、一般人と兵士別の把握システム、最下級の行政單位から中央の行政當局への登録人口上申手續規定などに關する詳細確實な記述は、他の時代の正史にその比を見ないところであつて、このような精密さをもたらしただけなくとも一つの理由は、初期金國の「猛安—謀克」が構成人口を的確に把握できたというその組織の性格と、後期においてその性格が維持擴大されたことによると考えられている。

かくて、『金史』食貨志一の金朝治下の戸口統計、すなわち

1187年	6,789,449	44,705,086	1戸あたり 6.59人
1195	7,223,400	48,490,400	6.71
1207	7,664,438	45,816,079	5.96 (大元より)
1207	8,413,164	53,532,151	6.33 (大元より)

は尊重されるべきものであつて、十二世紀から十三世紀はじめにかけての中國世界の總人口を再構成する場合に、かなり確かな根據を提供する、と結論される。ただ、ここで一戸あたりの平均口數が他の時代よりかなり大きいのが注目されるが、それは女眞族と漢族の兩者において戸内の奴隸人口が含まれているからであつて、人口總數はむしろ妥當であるという。

第二章は、宋代人口に關する検討にあてられ、加藤繁・宮崎市定・曾我部靜雄氏らをはじめとする日本の學者の研究をふまえた上で、まず宋の人口調査の特質が問題にされる。一般に認められた加藤氏の説、すなわち宋朝の人口調査はあらゆる年令の男女兩性を含んで、全人口を掌握するのが原則であつたが、ただ實際に把握された口數は非常に少なかったのだとする説は根據薄弱であり、宋代に公式發表された口數統計は、實人口を再構成するためには全く無視

してよいという。むしろ據るべきものとしては、加藤氏らが指摘するように、比較的眞實に近いと思われる戸數統計である。

もつとも、宋代の戸數統計を不正確にする二つの相反する要因がある。一つは、貧戸が名目上からの小さな土地を形勢戸に依附して、異常に大きい戸を作り、また均分相續が一般に行なわれていたにもかかわらず、それぞれが獨立の戸となれば、それによつて課せられるであろう負擔を免れるために、名目的に依然として單一戸にしておく傾向があり、帳簿上の戸數ははたがって少くなる。しかし他方、形勢戸の方では、稅役負擔を小さくするために、いくつかの假空の小さな戸に分けようとする反對の傾向がある。この相反する二つの傾向が互に相殺されるかどうか確言できないけれども、とにかく宋代の戸數總計は全人口再構成のために役だつといつてよい。かくて宋代の戸口總數表が示される。

	戸數	人口
1109年	20,882,258戸	46,734,784人 —戸あたり2.24人
南	1160	11,375,733
宋	1166	12,335,405
1173	11,849,328	25,378,664
1223	12,670,901	26,720,724
		28,320,095
		2.24

第三章は、以上二章にわたつて検討された金と宋の人口總計およびそれらの性格をふまえて、十二世紀から十三世紀初期にかけての時代の中國における人口總數を再構成しようとする。第一の最も簡単な方法は、右の一〇九年の北宋のピーク期の戸數約二千萬戸をもとにして、右の表に見える一戸あたりの平均人口數は少なすぎるから、實際は中國の他の時代と同様に一戸平均五人とすれば、北宋支配下の全中國の人口總數は約一億となるだらう。

第二の方法は、十二世紀後半から十三世紀はじめにかけての金朝治下の人口總數と南宋の戸數から、當時の全中國人口數を再構成する試みである。金朝の支配する北中國は北宋治下の華北よりも廣いから、かつての遼朝治下の總人口約四百萬 (cf. K. K. Wittfogel & Feng Chia-sheng, *History of Chinese Society: Liao, 907—1125, New York, 1949, pp. 52—58*) を差し引くとして、一一八七年には金朝治下の華北總人口は四千萬より少し多く、十二・十三世紀の交には四千萬よりかなり多かった。南宋の戸數は約千二百萬戸とし、一戸平均五人とすれば、總人口六千萬、これに華北を合すれば一億となるだらう。一二〇七年について同様に計算すれば、南宋の戸數のピークは一二六七萬九〇一戸だから、蒙古の華北征服以前には少くとも一億一千万の總人口があったことになるだらう。

第三の方法は、もっぱら金朝の人口統計にたより、かつ金朝治下の華北と淮河以南の南宋支配地域との大まかな人口比から類推する方法である。南北の人口比は、一〇八〇年において南の方が北より多かったといわれる (錢穆『國史大綱』第二卷・重慶一九四〇・五一—一四ページ)。南宋の人口が金朝治下の華北よりかなり多いことは十分に首肯できるし、また金朝治下の華北の人口が四千萬から五千萬の間であるから、十二世紀後半から十三世紀はじめの全中國の總人口が一億を越えていたことの傍證として、この推測も無意味ではないだらう。

以上が何炳棣氏の論文の主旨である。

II 「外交史」篇

1 Herbert Franke, *Treaties between Sung and Chin* (宋金

間の諸條約

ミュンヘン大學のH・フランケ教授による本論文は、はじめに、いわゆる中華思想の傳統をもつ中國において、條約というものは特別な性格をもつことが想起されている。つまり、條約が締結されるのは、中國が近隣諸國にその意志を押しつけることがもはや不可能となった時點においてであり、條約の締結ということ自体がアフリオリに中國の力の弱體化と、多國家ないし二國家システムの存在を意味する、ということである。そして、中國における多國家システムの原型は春秋戰國時代の國際關係に求められ、『左傳』の先例が典據とされるから、後世の條約においても「盟」の性格が残っている。條約は西方世界におけるように、一定の日に一定の場所で兩當事者が會合し、同一の條約文書に調印する形式をとらない。唐側と吐蕃側とがともに調印した唐蕃會盟碑を唯一の例外として、普通には兩當事者が並行してではあるが、形式的にはそれぞれ獨自に盟う形をとる。したがって、盟いはそれぞれが合った日に、ちがった場所でなされ、條約の形式的な締結は少くとも宋代の場合、それぞれ別個の宣誓文のコピーを交換したのちに發効する。それは近代の國際關係における批准形式に近いことが注意されている。

さて、宋金間で締結された主な條約は、一二三三年・一二六一年・一二四一年・一二六五年と一二〇八年の五つがあるが、それらの原文を研究するにあたって、いろいろな史料の中から完全正確な交換文書が知られるのは、早い時期の前三者に限られる。各條約の一般的な歴史的境位については、中國の史書にもちろん詳しい記述があり、またO・フランケの *Geschichte des chinesischen Reiches*, vols. IV & V や外山軍治氏の『金朝史研究』に詳しい論述

があるので、それらにゆずり、ここでは前三者の各條約(1133年、1158年、1141年)における往復交換文書を、『大金吊伐錄』『三朝北盟會編』『大金國志』『續資治通鑑長編』『建炎以來繫年要錄』などに引かれたものの校合によって、もつとも原文に近い形になおし、それらの翻譯と注釋を行なったのが本論文である。一一四一年より後の交換公文は、『宋史』や『金史』に要約された程度の内容では、完全な原文を分析しようとする本論文の場合の對象とはならないので、宋金の力關係の變化を示す概略だけが最後に觸れられている。

かくて、宋金間の交換公文の研究を通して得られる印象は、宋朝の外交政策が現實の力關係に即應して、はなはだ融通性に富むことであり、儒教的イデオロギーが現實に適用しないとみれば、それを外交政策の領域にもちこむことなく、純粹にパワー・ポリティクスの面を基調にすえていることである。交換公文に引用される經書の句や、『左傳』風の書式すら、そこでは裝飾的要素にすぎず、その意味で宋朝外交は合理的なものであった。この點で、宋代は確かに近世だと呼ぶことができる、と結論されている。

2 Evgenij Ivanovič Kyčanov, Les guerres entre les Sung du Nord et le Hsi-Hsia (北宋・西夏間の戰爭)

キチャノフ氏はレニングラードのソ連科學アカデミー東洋學研究所員。

『宋史』『遼史』『長編』のほか、戴錫章の『西夏紀』・吳廣成の『西夏書事』・曾鞏の『隆平集』によって、西夏國の形成を簡單に概觀し、九八二年以後の北宋との交戦を七期に分けて、それぞれ

の概況とその原因結果を考察した論文である。七期とは(1)九八二—一〇〇四年(一〇〇六年に和平)、(2)一〇四〇—一〇四四年(實際は一〇三九年より戦争状態)、(3)一〇七〇—一〇七二年、(4)一〇八一—一〇八六年、(5)一〇九六—一〇九九年、(6)一一〇二—一〇二七年、(7)一一一四—一一一九年である。論文のほとんどはそれらの交戦経過の具體的敘述にあてられているので、ここには詳しい紹介を省略する。

Ⅲ 「軍事史」篇

Sergei Aleksandrovic Školjar, L'artillerie de jet à l'époque Sung (宋代の投石砲)

シュコリヤル氏もレニングラード東洋學研究所員。

本論文は、火器の出現に先だつそれへの移行期、つまり十—十三世紀の宋代に、最高度に發達した中國の投石器の構造と使用に關する研究である。この技術は、同じ時期に世界最初のカタパルト——混合火藥を爆彈に使い、後には發射手段にも使った——を出現させた技術に密接に關係する。したがって、從來はもっぱら火器の出現に注目されたが、それにもまして火器出現以前の投石器を研究する必要があるという。

かくてまず、宋以前の投石器の歴史が簡単に回顧され、中國では昔から、テコの臺にとりつけられた發射器自體の彈力を利用する「機」が投石の基本裝置であつて、ヨーロッパや近東の投石器が、彈力性のある動物の腱をねじつて、そのエネルギーを利用した方法や、後にはおもりの重力をテコに利用した方法と異つた原理に貫ぬかれていた點に注意する。このような原理にもとづく「砲(=礮=抛)」の形と構造は唐代までに決定され、宋代にはその基本原理と

構造形式が本質的變化をうけることなく、ただ技術的に完成されたことによつて砲=投抛器の黄金時代を生み出したのであり、その技術は契丹・西夏・金・元にもとり入れられて、これら諸國の技術は同じ水準に達していたという。

この投抛器の構造は、主として『武經總要』によつて圖解説明され、旋風車砲・虎蹲砲・双梢・九梢砲など諸種の構造と機能の相違を説明したのち、中國のはりつめたバネ式の發射器が、西方のネジリ式または重力利用式のそれより射撃操作がずっと速く、また彈丸の初速度もより速かつたといふフリーの説(K. Haun, Geschichte des mittelalterlichen Geschützwesens aus orientalischen Quellen, *Studia Orientalia* IX/3, Helsinki, 1941)が確認される。ただ、フリーが發射器の架臺を必要に應じて高くも低くもできたとするのは、誤まりだとしている。これらの砲はきわめて多數實戰に用いられ、九七九年にはすでに宋の太宗の命令で、八〇〇臺の砲が作られていた。

彈丸は、もつとも多くは各種の丸い重い石であるが、從來から多くの關心を惹いてきたように、花火の技術と結合して、燒夷彈・炸裂彈・毒藥彈など各種の性質をもつ彈藥の使用が見られ、これは中國以外では當時まだ見られない新兵器であつた。

しかし、注意すべきことは、十世紀から十四世紀にかけて中國で用いられる「火砲」という語は、火器ができる前の、混合火藥を含む彈丸を意味し、稀にその種の彈丸を發射する投抛器を指すこともあるが、火藥の發射力を利用するいわゆる火砲を指すのではないこと、最初のブリミティヴな火器はようやく十二—十三世紀に出現し、「火砲」がこのような火器の意味に一般化するの、十五世紀

を待たねばならないということである。フビライの軍隊にいたベルシャ人が一二七——七二二年に作った「回回砲」が火器かどうかについて議論があるが、馮家昇の訂正説（回教國爲火藥由中國傳入歐州的橋樑）史學集刊六・一九五〇（北京・三四—五一—ページ）に従って、それはおもりの重力利用式發射機だとすべきである。つまり、「火砲」とあるからといって、これを火器とするのは危険であって、この時期にはまだ火藥を調合した發火彈、ないしそれを發射する巨大なベネ式投擲器の意味に解さねばならない。とにかく、十三世紀の中國では、攻城・防備・艦船攻撃・渡河作戰などにこの投擲器を使った戰術は、ユーラシアの他の地方と同様であるが、ただその使用が他の地方よりはるかに大規模であり、また發火彈の使用などによって、はるかに大きい戰術効果をあげた點に、中國の特色があった、と指摘されている。

Ⅳ 「民衆蜂起の歴史」篇

1 Georgij Jakovlevic Smolin, La révolte de la société secrete du Mi-le-chiao conduite par Wang Tsé, 1047—48 (王則の領導する彌勒教結社の反亂)

スモーリン氏はレニングラード大學に屬する。

著者の序論によれば、宋代の特色はさまざまな階層の都市住民が政治活動と反亂に加わることの激増した點に見いだされるが、それは一般農民の「反封建闘争」の一環として位置づけるべきであり、また、市民の闘争参加は、發展した封建制段階にあった中國の階級闘争に、本質的に新しい要素をもたらすものではなかったが、しかし中世の主要な階級對立の基本路線をある程度複雑化するとともに、

に、その路線に、より尖鋭さを加える意味をもったという、著者の基本的立場が提示される。王則による彌勒教徒の反亂は、その現象の顯著なあらわれとして、ここでそのような立場から取りあげられる。

十一世紀の二十年代末から反封建闘争が華北において異常な高まりを見せる背景には、「衙前」の賦役提供に壓迫された「中戸」の貧窮化、契丹や西夏との戦争による直接間接の被害、軍費調達のための各種の増税による過重負擔などの要因があり、それらの要因から、人民の困窮は一般農民のみならず、商人・市民までまきこんだ。食いあふれた大量の下層民は「養兵」的制度的もとに兵士となったが、兵士に對する給與の低下と軍關係職員の横暴と搾取は一般兵士の不満を増大させ、やがて十一世紀中葉に頻發する兵士と農民、さらに市民を含めた勞働大衆反亂の基盤が用意されていったという。

さて、王則の反亂の發端となった彌勒下生の信仰は、六朝時代からとくに華北の民衆の間に擴まつていたが、十一世紀の華北ではとくに都市地域に發展していた。李教を教主とし、貝州の小吏たる張繼と卜吉を擁し、下級軍人の王則を組織指導者とする彌勒教徒は、貝州の町をかれらの根據地に選んだ。そこは自然の要害である上に、堅固な城壁と深い濠にとりまかれた高みにあり、また三百年前に王懷古を指導者とする彌勒教徒が、唐朝に對して蹶起したゆかりの地でもあった。先にのべられた一般的な社會不安を背景とし、一〇四七年のはじめの大旱魃と物價暴騰によってさらに激化した不穩な空氣の中で、市民と駐屯軍兵士は彌勒教徒の蜂起準備にしいに組みこまれていったのである。

以下、貝州の武裝蜂起から、やがて反亂集團内部における對立勢

力の出現、貝州以外の華北各地との連繫、宋朝政府側の對應と鎮壓行動などの順で詳しい敘述が進められる。ただその中に、「運動の社會的基盤」に關する一節があつて、このような「町ぐるみの反亂は階級闘争の明確な、成熟した形態をとることができなかった」とし、「階級の自覺的な行動というよりも、彌勒教の教義に従つて、不正とその體現者に對する闘争という傳統的な闘争形態をつぐものであつた」との見解が示される。社會主義國の學者としては無理からぬ見解であらうが、近代の階級闘争史觀によるだけでは、中國の民衆反亂が「中世におけるすべての民衆運動に特有な、極度に薄弱な階級意識の結果としてあらわれる誤まり」を、いつまでも犯しつづけるものとしてしか評價できない限界を示しているように思われる。

ただ最後に、わずか二カ月あまりで鎮壓されたこの彌勒教徒の反亂は、やはり支配者側に大きな警告を投げつける効果をもち、政府における改革派の活動を繼續させて、やがて王安石の新法を出現さ

せる一つの契機として、補助的に作用したであらうとの評價を與えている。

2 Miyazaki Ichisada, Y a-t-il eu deux Sung Chiang? (宋

江は二人いたか)

本論文が寄稿されて出版がおくれている間に、宮崎博士は寄稿の二年後に、さらに手を加えて『東方學』三四輯(一九六七年六月)に日本文で發表された。紙數が限られているので、本論文の紹介は省略させていただく。

既刊の分冊に收められた諸論文は以上で終り、V「名人」篇以下はまだ刊行されていないようである。オーバン夫人が非常な苦心を拂つて整理された全冊が、一刻も早く續刊完成されることを願いつつ、私の紹介文を終りたいと思う。

(川勝 義雄)